

ぼくは ルドルフだ。

これは、ある猫の物語であり、わたしの物語でもある『ルドルフとイッパイアッテナ』の冒頭のことばだ。

わたしは、この作品で児童文学の世界にデビューさせていただいた。執筆したのは一九八六年の春だ。講談社の児童文学新人賞に応募しようと思って、ぼくはルドルフだ。……と書きはじめた。だから、このことばは、主人公ルドルフの物語のはじまりのことばであるとともに、わたしが児童文学作家の道に一步踏みだした瞬間のことばでもある。

とにかく児童文学の物語を書くなど、はじめでなかったし、物語の書き方を誰かに習ったわけでもないのです、わたしはどう書きだしていいかわからず、とりあえずそう書きだしたのだらう。だらうというのには、すでに三十年以上も前のことだから、

はつきり覚えていないからだ。だが、今思うと、これには大きな意味があったのではないだろうか。この、ルドルフにとっても、わたしにとっても最初の物語で、ルドルフはまず、自分が猫であることよりもさきに、名を名乗る。猫や人間であることは、変更不可能な宿命的要素である。だが、名はそうではない。変えることは可能だ。

とはいえ、名は、ある遺伝子を背負って、ある環境の中で生きてきた自分を表そうとするときの最初の名詞だ。つまり固有・有名詞なのだ。それまでいろいろあったにしても、ともあれ前向きに生きていこうという意志表明が名乗りなのだ。

ルドルフはそういう意志表明として、まず、「ぼくはルドルフだ。」

と名乗ったのだらう。そして、きっとこのとき、三十三歳のわたしは、

「ぼくはルドルフだ。」

と書きはじめると同時に、

「わたしは斉藤洋だ。」

と言いたかったのではないだろうか。



講談社写真部提供

1952年東京都生まれ。1986年『ルドルフとイッパイアッテナ』で講談社児童文学新人賞、1988年『ルドルフともだちひとりだち』で野間児童文学新人賞、2013年『ルドルフとスノーホワイト』で野間児童文学賞を受賞。「どうぶつえんのいっしゅうかん」(講談社)に収録されている「ガオーッ」は、光村図書国語教科書(平成4～13年度版)に掲載。おもな作品に『西遊記』シリーズ(理論社)、「アサー王の世界」シリーズ(静山社)など多数。